

理学研究科専攻長 兼 学科長から

化学専攻長 兼 化学科長 持田智行

本年 2011 年は「国際化学年」(International Year of Chemistry)にあたります。化学の振興・啓蒙に関する様々な行事が世界各国で行われています。例えば日本化学会の Web サイトをご覧ください。化学専攻においても、教員一同、化学の発展と社会貢献を念頭に、教育と研究を活発に推進しています。

2011(平成 23)年 4 月に、化学専攻では三名の新任教員を迎えました。有機化学講座には、松原亮介准教授(反応有機化学分野)が東京大学理学系研究科から、茶谷絵理准教授(生命分子化学分野)が立命館大学薬学部から着任されました。松原准教授は薬学部の出身で、有機合成反応、特に炭素水素結合の活性化に着目した研究を進めています。茶谷准教授は農学部の出身で、アミロイド病のもととなるタンパク質の凝集体(アミロイド線維)の形成に関する研究を行っています。無機化学講座には、高橋一志准教授(固体化学分野)が東京大学物性研究所から着任されました。電導性や磁性などの機能性を示す分子性固体の合成・評価が専門です。分子性導体の分野は我が国で深化した学際領域であり、今後の展開が期待されます。

化学専攻では、大学院連携講座として、この 10 月に理論生物化学講座を新設しました。この講座には、杉田有治教授、今井隆志准教授を理化学研究所から兼務として迎え、タンパク質などの生体分子や溶液などに関する理論的研究を推進しています。理化学研究所の計算科学研究機構(神戸ポートアイランド)の設立を契機に、化学専攻における理論科学の教育研究の充実を目指して設置された講座です。

受賞に関しては、大塚利行准教授(溶液化学分野)が腐食防食協会論文賞、津田明彦准教授(有機分子機能分野)が日本化学会 BCSJ 賞を受賞しました。また茶谷絵理准教授(生命分子化学分野)が日本分子生物学会富澤純一・桂子基金の第一回助成対象者に選ばれました。学会における学生の受賞(触媒学会西日本支部触媒科学研究発表会、イオン液体討論会など)も複数ありました。

本専攻の大学院入学定員は、博士前期課程(修

士)が 28 名、博士後期課程(博士)が 6 名です。5 月と 6 月には、他大学からの院進学希望者を主な対象としたオープンラボ(見学会)を開催しました。学部生のほぼ 9 割は修士に進学しています。修士修了者の 2 割弱はさらに博士課程に進学し、先端研究を担うとともに、卒業後も活躍しています。化学専攻の就職状況は比較的良好ではありますが、不況と震災の影響で、今年は多少苦戦を強いられています。同窓生の皆様方のお力添えのほどを、重ねてお願い申し上げます。

例年 7 月には、理学部サイエンスセミナーが行われます。このセミナーは、自然科学の各分野における最新の研究を、一般向けにわかりやすく紹介するものです。化学科からは、物理化学講座の和田昭英教授(分子動力学分野)が「光による化学反応のコントロール」と題した講演を行いました。ユーモアあふれる講演に、会場も盛りあがりました。一方、内外から講師を招いての学術講演会やセミナーが、専攻内でも随時開催されています。これらの状況については、化学専攻の Web サイトをご覧ください。今年は兵庫県内外の高校生・中学生の大学見学・模擬授業も複数回受け入れました。本学の認知度も上昇したと思います。見学に対応いただいた先生方にも感謝します。

ところで今年は震災の影響で、毎年 3 月末に行われる日本化学会の年会も中止となりました。学科では現在、学舎再配置に伴う研究室の移転が行われており、あわただしい状況です。学科事務に関しては、事務分室の茂木奈津さんに強力な支援をいただいています。教育に関しては、特に全学共通教育(鶴甲学舎)において、停年退職された先生方にも、多大なるお力添えをいただいています。この場を借りてお礼申し上げます。なお本学の組織は教員数、学生数ともに比較的規模が小さいため、良い研究教育には、教員間の相互協力体制が必要です。本学の存在感を増すために、また在学生の進路のために、卒業生の皆様がたのお力添えも必要としています。同窓生の皆様の変わらぬご支援とご指導を、重ねてお願い申し上げます。